

児童学を視野に入れた児童文学者・上澤謙二

—子ども学の先駆者たち

②—

学校法人白梅学園 理事長

小松 隆二

1 子ども環境の悪化と子ども学の必要性

2 個別研究から総合学へ

3 子ども学の源流

—児童学の出発と最初の宣言—

(1) 『児童研究』への道

(2) 最初の児童学の宣言

(3) 『児童研究』・「児童学」誕生の背景

4 上澤謙二のこと (以上、本誌創刊号掲載)

5 上澤謙二の足跡を求めて

—最後にたどり着いたところ—

職業柄、大学、学校、あるいは幼稚園を訪ね、施設やキャンパス、景観や環境、また教育の現場や実際に触れることが少なくない。そんな時に、それらを眺めているだけで、建学の理念や理想、その後のリーダーたちの姿勢が伝わってくるような大学、学校、あるいは幼稚園は、そうあるものではない。

二〇〇九年九月のある日、栃木県鹿沼市にある鹿沼幼稚園を訪ねてみた。東末広町にある同園から、眼下

を流れる黒川方面を望むと、市のセンターエリアとは思えないほど一面に爽やかな緑と清々しい水面がパノラマのように広がって見える。

その幼稚園で、一般の幼稚園ではそう感じとれない、なんとも爽快な雰囲気、心温まる先生と園児たちの交流・交歓に久方ぶりに触れることができた。それから、創立者やその後のリーダーたちの高い理想や理念が、その背景や土台に生き続けているという印象・思いを強く抱かされた。

この幼稚園こそ、本論で取り上げている児童文学者・作家、幼稚園事業の経営・実践者、またキリスト者でもあった上澤謙二の最後の活動の場であり、また今日まで上澤の理念・理想が引き継がれてきた実践の場でもある。

鹿沼市は、宇都宮からJR日光線で行けば鹿沼駅、東武日光線で行けば新鹿沼駅から入ることになる。日光にも近く、海拔一六四・五メートルの地で、景観もよく比較的過ごし良い地である。

JR鹿沼駅から中心街に向けて進むと緩やかな下り坂となり、次第に大きく街並が開ける。その街並みが、緑や花をほどよく覗かせて、派手さはないが、ほのぼのとした雰囲気をもたらしている。すぐに黒川にたどり着くが、その黒川と、もう一つ思川（上流は大芦川）の二つの川を中心に、いくつもの流れがまちを緑濃

く、潤いのあるものになっている。まちの名物としては、さつき、こんにゃく、錦鯉、屋台のまちなどが知られ、また農村部中心に神楽、文楽など伝統芸能もよく保存されている。

鹿沼は、日本の地方小都市としては景観・環境・文化などの面からは、まちづくりに成功している数少ない例といつてよい。日光の玄関口に相応しいまちで、まちづくりのリーダーたちのこれまでの打ち込みぶりがよく伝わってくる。

そんな鹿沼のまちに設置・運営されている鹿沼幼稚園は、鹿沼市の市街地のほぼ中心に位置する。今から五五年ほど前の創設時には、まさにまちの中心部の上田町に位置していた。隆盛を続けた結果、すぐに手狭になり、一〇年後の一九六五年に、創設の地からそう遠くない現在地に移転した。税務署や旧警察署の前で、地元の福田屋百貨店の隣であることを知れば、依然としてまちのセンターの一郭に位置していることが理解できよう。

園は、一方はまちの中心道路の一つ田町通りに、他方はまちの中心部を流れる黒川の土手に沿っており、豊かな緑と水に守られている。眼下に広がる黒川を見下ろすと、河川敷が黒川公園と通称される公園になっていて、憩いの場、散策の場としてほっとするほど心を和ませてくれる光景を見せている。市立鹿沼図書館

館、川上澄生美術館も黒川沿いで、すぐ近くにある。

現在の園でも、いたるところに上澤謙二の理想や息吹に触れることができる。正門を入るとすぐ右手にある園舎のレンガの壁に、純白の木板が掲げられ、創設者と創設者・上澤謙二の名前が刻まれている。少し進むと、桜の大木を真ん中にした園全体が望まれる。その光景・景観が何となく日本離れをしている。謙二の長男で園の理事もされている上澤善樹氏は、アメリカ生活もよく経験された人であるが、「ニューイングランド風」という印象を受けておられる。善樹氏と夫人で理事長・園長の幸恵氏の住まいでもある白壁が印象的な洋風住宅も、屋根上には風見鶏の風向を示す矢が風に鳴っていて、たしかにニューイングランド風である。全体が創設以来の夢を語りかけてくれる雰囲気なのである。

教室や手洗いも機能のみではなく、眺めているだけで明るく楽しくなる色合や装飾が施されている。手洗いのドアにはABCといったアルファベットの文字が大きく描かれてあって、園児が日常的にアルファベットの目にするように工夫されている。他の園にはそう見ないが、手洗いの壁面にまで、子どもの目を引く人気のキャラクターやきれいな色合が配されている。

廊下などには、抽象画も目につく。ニューヨークの近代美術館所蔵の抽象画、例えばピート・モンドリア

ンの絵「ブロードウェイブギウギ」（一九四三年）が複製ながら、原寸大にして掛けられている。分かり易い具象画の美しさだけではなく、自由に想像力をかきたてる抽象画のいいものも、幼い頃から自然に目に入るように配慮されたものである。

それに園児たちが楽しそうに、自由に振舞っている。また先生や職員の方々が一人一人が園を代表するような意識を持っているのではないかと思えるほど、来訪者に対する挨拶や礼儀がきちんとしている。

思えば、戦時下に、上澤は思いもよらぬ苦しい体験を強いられた。自由な言動は封じられたし、あげくは活動の拠点・洗足幼稚園も、自宅も戦災で失ってしまった。そういった辛酸・苦悩を交えた戦時体験の果てに、与えられた最後の活動の場がこの鹿沼幼稚園であった。たんに幼稚園事業に打ち込んだだけではなく、戦後、彼の児童文学、とくにキリスト教児童文学、それらの理論化・科学化、あるいは児童文学に発展する視座なども、この地・この園で構想、展開され、発信されたものである。

このように、鹿沼幼稚園では、上澤の建学の理念が今も生き、さらにはそれを超えるように誇りをもって幼稚園活動が展開されている。園の紹介や園児募集に使用されるリーフレット「鹿沼幼稚園のご紹介」にも、「教育方針」として「上澤謙二の理念に基づき：

遊びを通じて、自主性・社会性・情緒性・身体等の各種能力の発達を基本としており、さらにお子様をこれらを学び身につける事に加えて、一生にわたり幼稚園の生活を楽しく思い出させるようにしたいと考えております」と、上澤による創立とその建学の理念・精神に今も沿っていることが謳われている。

私が鹿沼幼稚園を訪ねたのは、上澤謙二がもう一度見直されてよいのではないか、そんな気持ちを抱いていることである。彼の名前がたんに鹿沼幼稚園との関わりで生き続けるだけではなく、児童文学や幼稚園事業においても、児童学の視点・視野を持つにいたった研究者としての業績においても、また八八年の長い生涯のほぼ半分（少年時代までと疎開以後）を過ごした鹿沼の地における足跡についても、さらにとくに地方で生活、実践し、発信する意味についても、もっと掘り下げるべきではないか、そんな気持からであった。上澤最後の活動の場を自らの目で見、触れた結果は、やはりその視点が間違いでではなかったことを教えられた。

6 上澤謙二の生涯と活動

(1) 上澤謙二の生涯

上澤謙二は、一八九〇（明治二三）年一月、栃木県

上都賀郡東大芦村（一九五四（昭和二九）年に鹿沼市に合併）に生まれた。地元の引田尋常小学校および高等科に学び、卒業。ほどなく上京するが、幸い日本銀行に採用され、見習いから始める。最初から東京に出る覚悟があったように、向学心・向上心が強く、夜学に通うなどいろいろのことに興味を示した。

一九〇七年、一七歳の時に一八七三年以来の伝統を有する日本橋教会でキリスト教の洗礼を受ける。それを機に、日曜学校で教壇に立ったり、キリスト教関係の著作の執筆を始めた。一九一六年には、最初の著作として『耶蘇伝』（洛陽堂）を世に送り出す（『新幼児童話選集』（日本童話協会、一九五二年）の執筆者紹介には、上澤については『耶蘇伝』の一年後の「大正六年処女出版。又逢う日まで」を出版」とあるが、同書は未見）。一九一九年、結婚するが、ほどなく日銀を退職、アメリカに渡る。若くして上京、さらに渡米と、つねに上に挑戦する姿勢が注意を引く。

アメリカでは、キリスト教の活動に従事しつつ、ワシントン州立大学に学んだ。同大を卒えた後、一九二三年、帰国する。このアメリカでの四年間は、人生における基礎づくりで、重要な時期にあたる。残念なことに、上澤は子どもたちにはアメリカ時代のことを余り話すことはなかったという。

帰国後は、日曜学校の活動に打ち込みつつ、子どもの

お話・童話、とくにキリスト教のお話・童話の創作・執筆、加えてそれら作品の応用・実践にも力を注いだ。

一九二七年、婦人之友社で『子供之友』の編集にあたる。時代環境が悪化し始めている、この昭和の初めに、昭陽堂書店から巖谷小波、賀川豊彦、倉橋惣三を顧問に、聖書物語文庫が刊行されるが、蘆谷蘆村、村岡花子、沖野岩三郎、野辺地天馬らとともに、上澤も編集・執筆で中心的役割を担っている。あわせて、キリスト教児童文学や童話の理論的研究にも熱心に従事している。

その後も婦人之友社との関係は続き、『婦人之友』に福島の子守学校訪問記はじめ、執筆を行っている。同じ頃、一九三二年になるが、キリスト教に基づく童話、児童文学の研究を深め、啓蒙するためにキリスト教童話研究会(後に基督教童話協会、さらにキリスト教文化協会となる)を始め、機関誌として『光の子』を発行、編集にあたった。

一九三八年には、一九二六年創設の東京市荏原区中延町(平塚)にあった洗足幼稚園を引き継ぎ、園長となる。洗足幼稚園は、都下でもキリスト教の精神に基づく先進的な活動を展開する園として知られ、高く評価されていた。上澤個人としても、経営にあたるだけでなく、保育童話などのお話しを園の教育や子育てに活用、実践する。

戦時下になると、思想や宗教統制、さらにキリスト

教や教会への弾圧が厳しくなる。それを避けるためもあって、比較的早くから戦争協力の姿勢に立つ作品も発表していく。この点は、これまでも議論を呼んできたところである。ただ留意すべきは、『少女少女のための戦、銃後物語』(新生堂、一九三八年)、『力を合わせて 少女少女銃後実話』(童話春秋社、一九四〇年)などで戦争協力に沿う作品を発表したかと思うと、上澤が編集代表格であった基督教童話協会の活動、同協会の編集した『第二基督教児童童文学選集』(新生堂、一九四一年)など戦争やその協力といった匂いを感じさせない活動にも従事し、作品も発表している。

このように、上澤は、多くの文学者と同様に戦争協力に沿う活動に従事したことは否定できないが、同時に戦争協力一辺倒であったのではないことも留意されてよい。この点は、服部裕子氏の「戦時体制下における上澤謙二の作品」(『愛知女子短期大学紀要』第三一号、一九九八年三月)が詳しく明らかにしているところでもある。

戦局の一層の悪化とともに、空襲も激化。東京市内の幼稚園は、実質的に運営が困難になっていく。

一九四四年六月、当局からも休園の措置が下され、戦時託児所としてのみ存続が可能となった。大都会では平安で、落ち着いた幼児教育・保育は困難になったのである。洗足幼稚園も、戦時託児所となり、上澤は園

長から所長に変わる。

しかるに、空襲による危険も日増しに高まり、それに伴う都会からの児童の脱出・減少によって託児所に子どもたちが集まらなくなった。とうとう洗足幼稚園をつぐ戦時託児所は、同年一二月には閉所。さらに、それに追い打ちをかけるように、一九四五年三月の大空襲により、自宅と共に旧洗足幼稚園の施設も全焼する。東京でも高い評価をえていた幼稚園でも、このような惨憺たる有様であった。この頃には、上澤は家族を郷里の鹿沼に疎開させていたが、それを追って自らも郷里に疎開せざるをえなくなった。ほどなく郷里で終戦を迎える。

戦後、鹿沼を拠点にしつつも、時々上京するなどして、保育童話の創作、研究、運動を再開した。日本日曜学校協会主事、婦人之友社編集担当などの仕事も引き受けた。『日本児童文学』などへの寄稿、単行本の刊行も再開した。

このように活動の軸足を東京に移しつつあった一九五二年頃、鹿沼では幼稚園の必要が訴えられ出す。それに促されて市長以下まちのリーダーたちが動き出した。ところが、その園長として、上澤が地元を挙げて要請されることになった。一九五三年のことである。上澤は、東京に戻りたい気持も持ちながら、結局、郷里からの要請・期待に応じて園長を引き受け、

拠点を鹿沼に置き続けることにした。幼稚園の現場で、しかも地方における現場で、子どもの教育や子育て事業を実践し、理想を追求する道を改めて確認したのであった。

同幼稚園では、亡くなるまで園長を続けるが、当時では鹿沼唯一の幼稚園であり、市長以下名士たちが理事に名を連ね、鹿沼幼稚園と上澤を支援した。お蔭で、園は上述のようにまちのほぼ中心にあたる上田町に設置された。その後、手狭になって移転することになるが、そこからそう遠くない東末広町に移転する。その土地も市街地の中心に近い。

それ以後、上澤は、子供本位の幼稚園活動を実践する傍ら、キリスト教に沿う童話・お話、あるいはそれらの編集や執筆にも力を注いだ。その成果の一つが前掲『保育のための童話学』であり、また『いま、ここ保育』（恒星社厚生閣、一九五五年）であった。

一九五〇年代の進行とともに、上澤は、著作活動を積極化するが、労働運動が高揚する当時の社会状況を受けて、栃木県の地方労働委員会会長、労働争議幹旋委員など、また地元の鹿沼では図書館運営委員会会長、社会教育委員などに就任している。同時に大学での教育にも携わることになる。東京家政大学教授、川村短期大学講師等の仕事である。個人誌『ひとつ星』を鹿沼・東末広町から発行したのもこの頃である。さ

すがに、八〇歳に達する一九七〇年代に入ると、執筆など社会に向けた活動はめっきり減る。一九七八年、高齢で逝去。享年八八歳であった。

現在の鹿沼幼稚園は、前述の通り創立時の土地・施設ではない。しかし、同じ市街地の中心近くに位置し、上澤の理想を継承して活動を展開している。まもなく六〇周年も近いが、この間園長は、謙二亡き後は、夫人の百合子氏、現在は三代目の園長として、謙二の長男・善樹氏の夫人幸恵氏が務めている。謙二には、最初の夫人多恵子との間に一人、多恵子夫人が亡くなられた後の夫人百合子との間には二人の子どもがいる。

なお上澤は、鹿沼での幼稚園活動・事業に従事し、すと、地元では公職を整理しだす。六〇歳を超える年齢で、かつ東京でもいくつかの活動を引き受けていたので、相当の負担であった。公職を減らす分、幼稚園活動、それに執筆活動に時間を割くようにした。

(この節の戦前の経歴については、上澤善樹氏からの聴取、西田良子「上澤謙二」『日本児童文学大事典・第一巻』〔大阪国際児童文学館篇、大日本図書、一九九三年〕を参考にさせて頂いた)。

(2) 児童学にたどりつく上澤の活動と理念

上澤は、今日では児童文学者としては忘れられた存

在に近い。服部裕子、佐々木由美子氏らの先行的研究・成果はみられるが、日本児童文学者協会編『現代日本児童文学作家案内』(すばる書房盛光社、一九七五年)などには、蘆屋蘆村などと共に、取り上げられていない。

それらにもうかがえるように、彼の出発点となった童話・お話類の作品も一般的にはそれほど関心をもたれてはいない。さらには、児童文学者で、学としての童話を提唱した人はそう多くないのに、戦後間もない時期に、児童学を視界に入れた人となると、極めて稀である。心理学・教育学などからの児童学への接近は珍しくないが、とくに児童文学からの児童学への到達は、稀少である。この点でも、これまで上澤に注意を向ける研究者はみられなかったのである。

上澤に関しては、この童話学や児童学との関係を含め、明らかにされていないことが少なくない。著作目録の作成さえ完成されておらず、本論の末尾に付した上澤の著作目録は、これまで明らかにされている点数に比べればはるかに多いものではあるが、それでもまだ不十分である。深い研究、さらには創作・文学を超える総合的研究となると、なお今後に残されたままである。

上澤の文学を中心にした思想と活動にあつては、①キリスト教、②子ども、③幼稚園、そして④児童文学(童話・お話)が基本的な四本柱になっていた。

上澤が一〇代の頃からひかれ、支えにしてきたキリスト教の愛とヒューマニズムを最も必要としているのは子どもたちであった。その子どもがキリスト教の教えの下で心豊かに生育・成長するのを支援するために、上澤が選んだ方法・手段は、やはり若い頃から彼が関心をもっていた文学、とくに子どものための文学、童話、お話など、いわば児童文学であった。

それらの実践のために活用されたのが幼稚園であり、また日曜学校であった。中でも主要な場として活用されたのは幼稚園であった。たしかに、キリスト教精神の普及のためには日曜学校も有効で、実際によく活用しているが、児童文学・子どものお話を最も自由に活用できるのは、彼にとっては幼稚園であった。具体的には、いうまでもなく戦前は洗足幼稚園であり、戦後は鹿沼幼稚園であった。

上記の①②③④の間には、彼の内では、以上のような役割やつながりがあったのである。

上澤が児童学を思い描いたときも、具体的に体系や内容を示すまでには至らなかったが、当然、この①②③④を礎や柱にしたものであったと考えてよいであろう。子どもに関する総合的な理解や研究を目ざす児童学とはいえ、彼の場合はあくまでも童話を軸に、それにキリスト教の精神・色合に基づいて構想されたものであったと推測できる。童話を軸にであれ、子ど

ものより良い成長、より良い暮らしを科学的に究めていけば、文学など一つの領域のみでは子どもの全体像の把握、総合的理解、ひいては子どもの成育過程の全体像を的確に受け止めることは、不可能であった。そのことを、上澤はよく分かっていたので、児童文学や童話学に籠らず、それを超えて総合的な児童学に行きつくのは自然の成り行きであった。

ただ上澤は、キリスト者であると共に、児童文学者でもあった。一般的な、また日常的な活動の基軸は、あくまでもキリスト教の理念・精神に支えられた文学活動であった。童話・お話を中心に文学で発信し、文学で終始する。その上で、晩年に至り、子どもの発展、向上を総合的に考え続けた末に、児童文学を軸にする児童学にたどりついたのであった。

上澤は、子どもの頃から文学に興味をもった。彼にあっては、たんに読み手・読者として文学に触れるだけではなく、自らも筆をとり、多くの創作を発表した。しかも、文学でも子どもを対象にしたものに絞るようになり、児童文学に専念し、深く関わることになった。

彼の場合、文学に関しては、創作として自身が芸術的に納得するものを書くという姿勢にとどまらずに、子ども本位の視点から子どもに相応しいもの、子どもに真に役立つものを追求し、子育て・保育活動への活

用・応用の実践にも取り組んだ。

そこでは、子どもの立場に立って子どもを真正面から見ていること、それだけにこそ科学・理論の眼も向けていることが上澤の特徴である。「子どもを真ん中に」という視点や童話・お話の科学化・理論化の視点である。それは、子どもの生育・養育を援助するのに、大人が個人的な体験や思いこみから押し付けるのではなく、子どもに真に合う方・方法を科学的・客観的に創造、究明するためであった。

同時に、子どもへのお話の提供は子ども本位に実践するのが上澤の考え・方法であるが、それに重ねて、キリスト教主義に沿って活かし、伸ばそうとするものであったこともいうまでもない。

それだけに、童話・お話を大人の都合や考えだけで、ただ上から子どもに与えればよいという発想や運動には組みしなかった。子ども本位に、より高い効果を考える場合、面白く、為になるということが必要であるが、それを大人の思い込みでそうするのではなく、科学的・論理的に究め、展開することにこだわった。童話・お話など児童文学の科学化・客観化を重視したとおりである。

この視点は、児童文学にのみ限定される見方ではなかった。文学全般に対しても、芸術的視点・芸術的充足のみで終わらせず、科学・理論の側面からもアプ

ローチし、納得的に説明する必要を訴える意味も持っていた。

その際、上澤は、基本的には多様性の中に子どもを受けとめる。とくに貧困、障害などハンディキャップを抱える子どもには大きな注意を向けている。それは、『子供の生活を裏から観る』（新生堂、一九三四年）で取りあげた多くの事例紹介にもよくうかがえる。盗みを働く子、聲啞など障害を負う子、吃音に悩む子などを浮き彫りにして示しているのがそれである。

これらの究極の到達点が、児童文学を中心にした理解・取り組みを軸に、しかしそれをも超えてたどっていた、より広い児童学であった。しかし、児童学の入口に立ってその中に入りかけたところで、先に進むことなくとどまってしまった。上澤がメモなり構想なりをノートにでも残していれば別であるが、上澤の考える児童学の内容が明らかにされることはなく終わったのである。

7 童話学の確立を目指して

—童話・お話の理論化への挑戦—

(1) 童話の科学的・理論的研究に向けて

上澤は、創作とともに、個人的には児童文学、とく

に童話・お話の科学化・理論化への努力を繰り返して行っている。それだけではなく研究会や協会など組織で活動するときにも、研究、そして科学化・理論化の役割・活動を重視した。それが彼の童話学であり、いづれ児童学の礎となるはずのものであった。

上澤の文学的業績の中心に位置するのは、今日からみれば童話・お話の創作とその科学的・理論的研究である童話学への挑戦である。さらにその先に児童学が具体的な内容をともなつて位置づけられたら、一層高い評価を受けることになつていたにちがいない。だが、児童学については、ただ視野に入れただけに終わり、体系、内容、構成などの提示、展開にはいたらなかったのである。

いづれにしろ、上澤は芸術的な営為である創作にとどまらず、またキリスト教的な精神の受容・展開にとどまらず、児童文学であれ、その中のキリストに基づく童話・文学であれ、理論的・科学的アプローチにも大きな関心を示した。

例えば、上澤が中心となつた昭和初期の基督教童話協会の規約や活動を見ても、「基督教童話の理論的研究」を第一に挙げていた。決してキリスト教の精神・理念を上から押し付けるのではなく、科学化・理論化の意味・役割を重視した。同協会規約の目的の第一項に「基督教童話の理論的研究」を掲げ、「近來基督教

童話界が賑やかになつて来たことは喜ぶべきことです。が、未だ文学的、歴史的、文献的その他の研究は欠けてゐるやうです。此欠けた処を幾分でも補いたいと思ひます」と主張している。

あわせて、「基督教児童文学理論研究会」も開催して、単に聖書やキリスト教の伝道・啓蒙だけではなく、その土台のところでの研究にも従事している(基督教童話協会〔上澤謙二〕編『第二基督教児童文学選集』新生堂、一九四一年)。

いうまでもなく、上澤が童話・お話の科学化・客観化に打ち込んだのは、子どもの生育に童話・お話の意味・役割がきわめて大きいことをよく理解していたからであつた。意味・役割が大きいだけに、子どもへのお話は「漫然と、卒然と話さるべきではない。又は話手自身の単なる興味や思いつきで話さるべきではない。」(上澤謙二『新幼児ばなし三百六十五日』(厚生閣、一九三五年、三六年)所収の「はしがき」、二頁)と考えていたのである。

例えば、長い間、一般的には幼児も嬰兒も一緒に対応されてきた。そのおかげで、「いろいろな混淆、紛糾、不都合、不合理が、現はれてゐる」(上澤謙二前掲『赤ちゃんばなし』二頁)という認識を、上澤はもつていた。その点を反省して、赤ちゃんに対するお話の効果、意味付けなどをきちんと客観的に検証、理論化し

たうえで話されるべきであるという見方に立つようになつていた。

そのような検証の結果、児童文学の科学化・客観化として、上澤は、お話の低年齢化を訴え、同時に幼児と嬰兒に分けることを提言している。嬰兒・赤ちゃんにも母親のお話が意味をもっている。しかし、科学的に調べることもなく、従来こうだったからとか、年長の幼児に対処するついでにといったあたり方で、児童一般・幼児一般として扱うのはよくないという認識であった。これまで幼児も嬰兒も一緒に扱ったことから混乱が見られたことを常々反省していたのである。

その理解・認識から、童話やお話に関しては赤ちゃんばなしの必要を提唱すると同時に、その見方の正当性の確立とその裏づけのためにも実践と検証の努力も続けた。

その際、母親が子どもにお話をするのがとくに意味があると理解していた。(幼いものの心の奥の部屋を滑らかに開ける鍵)をもっているのは母であるとか(上澤謙二前掲『赤ちゃんばなし』二七四頁)、あるいは「お母さんは子どもに取って、すべてのすべてーオールである」(『赤ちゃんばなし』二二六三頁)というように、母こそ赤ちゃんの唯一の教師といった表現などを用いて、幼児・嬰兒時代のお話の大切さ、また母親の役割の大きさも訴えている。

かくして、上澤はその後増加する赤ちゃん・嬰兒研究の先導者の一人になったのである。

(2) 童話学の具体化

童話・お話の理論化・科学化、ひいては童話学の確立に向けて、上澤は具体的にもいろいろの側面からアプローチし、成果を発表している。彼は、まず童話がたんに上からの教訓であってはならず、教育的でなくてはならないという認識をもっていた。

教育とは、教訓とは違って、上から一方的に与えるものではなく、下からも自由に受けとめ、主体的に学ぶものである。教えるものと教えられるもの両者、つまり教育しあう両者には相互的・双方向的な側面がある。また童話やお話であれ、作品の目的・意味や楽しみは、話の内容に内包されているものである。あらかじめ教訓的な目的がお話の内容とは別に、外で、あるいは上から用意され、お話はその教訓に沿うもの、あるいは上から与えるものであってはならないと考えていた(上澤謙二前掲『保育のための童話学』一一七―一二二頁)。

もつとも、教訓的であってはならないとか、上から一方的に枠を設定してはならないということは、大方の児童文学者が言うところなので、要は実際の作品も

そのように創り上げられているかどうかである。

その点では、上澤の場合は、上からの押し付けや形式・公式の設定は、できるだけ排除する姿勢であった。しかし、やはりキリスト者であれば、キリストの教えは絶対的な存在であり、それを受けて、作品もあらかじめ外から用意された愛、正義、友情などの理念・精神が必ず勝ち残るといったきれいごとで結論づけ、まとめられる場合もある。それは塚原健二郎なら塚原を取り上げても、同様で、ある種の特定の傾向をもつ作品や傾向を批判しつつ、それと違ったところで自らも同じ弊に陥っているのに通じている。

児童文学者なら、子ども、とくに差別を受けるものの、家庭などで恵まれないもの、弱い立場のものに愛情や共感を示すのは当然である。その点で、塚原にしても、そういった子どもたちに強い関心を示し、子供の友情、正義、純粋さによって救われたり、護られたりする作品を多く書いている。実際に、主役や中心になる子どもたちは、つねに正しい側、純粋で清らかな精神の持ち主と位置づけられる。その上で、正義・誠実は最後には勝つとばかりに、子どもたちの立場・考えが正義であり、勝ち残るといった結びでストーリーは終わることが多いのである。

ところが、現実はそのほど単純でも、きれいごとでもない。そういったストーリー自体が著者の一方的な思

い入れや期待であって、現実と乖離して型にはまった内容、形式、叙述になっている場合もみられる。それと同じ批判を、上澤の視点・方法にもできるのである。

それでも、上澤は上からの思い入れ、教訓、型・枠の設定を批判した上で、お話をたんに楽しむだけでなく、また「幸福をまき散らす天の使い」(前掲『保育のための童話学』二六九頁)といった抽象的な美辞で説明するだけでは不十分であることも指摘する。多様な側面から論理的に分析、整理することで、可能なかぎり内容、創作性などを一般化・理論化することも試みている。それによって、幼児・赤ちゃんの心身全体の成長に寄与する童話・お話の意味・役割を客観的・科学的に位置づけようとしたのである。

そのような姿勢・関心から生み出された成果が一九五四年刊行の前掲『保育のための童話学』である。鹿沼幼稚園で園長として実践を始めて間もない段階での理論的到達点を発信したものであった。

まず保育童話の概念・構成について、童話とは①主役(人物のみか、犬、猫などもなりうる)がいること、②子どもを引きつけるほど面白いこと、そして③全くのつくり話ではなく、ありのまま表現されることの三点を基本要素として整理している。面白いことでも、面白ければよいと簡単に片づけるのではなく、「面白」とはどんなことか(上澤謙二前掲『保育のための童

『話学』(一一頁)と突き詰めている。また「ありのまま」というのは、人工的につくった状態ではなく、「生活に因んだ童話」(上澤謙二前掲『保育のための童話学』六二頁)にみられる日々のあるがままの生活を重視する視点、つまり日常生活を反映し、現実・実際につながる内容をもつものという視点に立つものであった。

保育童話の機能・役割については、キリスト教的に心の飢渴を癒すものを前提に、①哲学に通じるもの、②芸術を培うもの、③道徳を養うもの、④宗教を育むもの、⑤算数になじむもの、⑥理科に導くもの、⑦社会を教えるもの、という七点に整理、分類している。

いずれも、幼児・嬰兒自身がその段階では意識して受け止め、生かせるものでない。しかし、童話・お話をただ単純に楽しんだだけと想っていたのに、例えばいざれ成育してから、ある物事での決断、あるいは進学・進路を決める際の判断力などにもプラスになって生きる場合が少なくないと考えるのである。

また保育童話の特徴については、①自由性、②ありのままという意味での具体性、③包容性、④連続性の四点に整理している。現実の生活の中に自然につねに見られるものをありのままに観察しつつ、発想や表現としては自由に、上からの枠や形式にとらわれないものであること、それでいて、まだ未成熟で幼い幼児・嬰兒たちに対しては包容力のあること、あるいは成育

の段階や状況を通して連続性があり、バラバラでないことも重視していたのである。

このように、保育童話・お話にしても、専ら芸術的純化・充実に打ち込むだけではなく、童話学を目ざして科学の眼で整理、分類、さらには理論化に向けて深める努力を続けたのである。

それに、童話・お話を学として科学や理論の眼でも見る取り組みに挑戦するにも、子ども本位の視点、また子どもを総合的に見る視点も欠かせない。すると、もっぱら童話学に取り組み、その確立で終わるのではなく、もっと広く子ども全体、子供の成育、成長、発達のための方法・取り組み全体にも眼を向けざるを得なくなっていく。幼児のために有益なあり方を学問として、科学として追求・展望しようとするあり方である。

その結果、彼は具体的な像は描くまでには至らなかったものの、童話学の限界を認識したかのように、それを超えて児童学を描き、それに向かって努力しようとした。既存の枠を超えて全体的・総合的な子ども研究を視界の隅に取り入れつつあったということである。わざわざ児童学という言葉の研究の性格もある著作のなかに書きとめたのは、そんな気持の表明にほかならなかつたといつてよいであろう。ただ、児童学を僅かに視野に入れてはみたものの、具体的に明快な像・体系を描きあげるには年齢的にゆとりがなかつた

のである。

その後、保育や保育園に関する上澤の著作には、他に『いま、ここ保育』（恒星社厚生閣、一九五五年）がある。そこでは理論的関心よりも保育の現場への関心が専ら示されている。日々幼稚園で直面する数々の問題を反省・検証の意味を込めてまとめたものである。彼自身「その時々々の取扱、または処置が果たして正しかったかどうか」「一人の保育者がその経験と心境とを、ありのままに記したもの」（同書、三頁）と説明している通りである。

8 戦後の新しい生き方

（一）戦後すぐの再出発と挑戦

第二次世界大戦後、上澤の立ち上がりは早い。というより、戦前・戦中の継続で、休む間もなく保育事業、文学や保育関連の執筆・編集活動、キリスト教の活動に取り組み続けたといつてよい。その要因の一つは、戦争直後の混乱や荒廃とは無縁であった鹿沼という地方のまちを拠点に生活、活動していたことが大きいであろう。戦後の新しい出発に際しては、上澤としても、精神、理念、思想等の関わる内面的な面では難しい葛藤に直面したことは想像に難くない。多くの人

たちと同じように、外見的には十分に戦中の総括や自己批判のないまま、しかし日本基督教団による戦争協力の罪の告白もあり、それを一信徒として受け入れつつ、事業や活動を継続、あるいは再開する形になったのであろう。

もつとも、前述のように、上澤は戦時下にも戦争協力とは距離を置く活動や作品の発表も継続していた。またキリスト教というむしろ被害・抑圧を受ける側にも立っていた。それだけに、戦後は戦争協力的側面を切り捨て、子どもとキリスト教に関わる活動、そしてその延長上にある幼稚園や日曜学校の事業を中心に活動の再開をはかることは容易であったのである。

上澤が戦後最初の単著として世に送り出したのが何であるかは、断定できない。多作の上澤の著作全てを確認できたわけではないからである。早くも戦後すぐに著作を送り出しているが、まとまって発表しだすのは、一九四八年頃からである。同年には、『偉い人たち 盲の大臣』（羽田書店）、『幼児のお話教育』（巖松堂書店）、『クリスマスの本』（日本基督教団出版事業部）などを刊行している。多作の上澤ゆえ、見落とし・漏れがないようにすべてを確認するのはなお今後の課題であるが、一九四八年の刊行でも、敗戦直後ということを考えれば、随分早い時期の立ち上がりであり、また成果であるといつてよい。まだ幼稚園の実践

活動に深くは関わり直していない時期である。

これを機に、著作活動が復活し、一九五五年頃まではほぼ継続的に著書が世に送り出される。実に旺盛と言ってよいほどの活動ぶりである。一九五〇年代の後半(昭和三十〇年代)になると、六〇歳代の後半に入る年齢的な面、それに幼稚園の園長、複数の大学での教育などに見られる多忙さもあってか、著作活動のスピードはやや鈍る。

戦後の著作活動の再開を見せた一九四八年段階では、まだ児童学への視座や研究的視点・関心の復活は、それほど明快にはうかがうことができない。それでも、同年発行の前掲『幼児のお話教育』には、幼稚園話の性格、使命等の分析・説明を通して、理論的関心の一端がうかがえる。しかし、本格的に関心を深めるのはその後のことになる。

『偉い人たち 盲の大臣』は、戦後の混迷・混乱から立ち直る過程で、子供にまず「よろこび」、さらには「理想」や夢を与える必要を考え、それに応えようとしたものであった。他の著作は、自分の半生をかけて一貫して取り組んできたキリスト教と子どものお話に関するものを、なお混沌としてはいるが、新しい空気が流れだす戦後の時代に合わせて、改めて世に送り出したものであった。

そのうち、内容的にも注目してよい『偉い人たち

盲の大臣』について、以下に取り上げてみよう。

(2) 科学化・理論化視点の到達点

『偉い人たち 盲の大臣』は、上澤が長年心がけてきた子どもの生育、成長に関する研究・認識にみられる戦後の最初の到達点、あるいは新しい出発点を示すものであった。

戦後、時代が大きく変わりつつあった現実をみて、上澤は改めて子どもの生き方、子ども時代に必要だと考えてみた。新しい時代の生き方として彼がたどりついたのは、子どもたちが子どもの時代になすべきこととして、「理想を定める」、「志を立てる」生き方を身につける必要性・重要性であった。それに応える一つの方法として「偉い人」の生き方を手がかりにそのことを考える例・あり方を具体的に示したのが『偉い人たち 盲の大臣』であった。

偉い人とはどういう人か。上澤は、多様な例を示している。そこで共通するのは「人のため、世のため自分を犠牲にしてつくすこと」が「新しい偉人」「ほんとうの偉い人」(上澤謙二前掲『偉い人たち 盲の大臣』「はしがき」二、三頁)の生き方・あり方であると位置づけた。

十人の多様な外国人を例にしたので、経歴・事実の説

明では多少誤りはあるが、労働運動・社会運動、障害者とその活動、差別から解放される黒人、伝染病と戦う医師、平和と世界の国々・人々の連帯を追求したエスペラントの父など社会的に貢献活動を行う人々に眼を向けていることが注意を引く。つまりマイノリティ、ハングリーキャップなどに配慮し、差別や抑圧と戦う側の人、それを克服した人を取り上げているのである。

このように、新しい時代を迎えて、上澤が示した「ほんとうの偉い人」、立志・立身の目標にかなう人は、弱者や差別を排除するために闘う人であり、また戦争や暴力を阻止するために戦う人たちであった。あるいは地位や名声を得た人の中でも、ハンゲキャップや差別を克服してそうなった人たちであった。単純に会社を作って成功した人、大金持ちになった人、政治家・役人などで地位・役職を得た人などではなく、社会的に弱い位置に置かれながら、その立場をはねのけて高い評価・地位を得た人や、社会悪と闘った人を理想にかなう人としてあげているのである。

例えば、上澤は、エスペラントの父・ザメンホフの章で、「自分の名とか富とかいうことは一向考えない。ただエスペラントのため、人類のために生きている。そのためには自分が消えてしまうことを本望としている。」（上澤謙二前掲『偉い人たち 盲の大臣』九七〜九八頁）といった具合に、本物の偉い人の生き方

を示したのである。

戦前にも、上澤は障害者などを著作に取り上げてはいる。しかし、明快にハンゲキャップや差別の意味や位置を受けとめて社会的に重要な問題として真正面から訴えたわけではなかった。この辺にも戦後の上澤の新しい一面を見てとれるであろう。

この『偉い人たち 盲の大臣』でみせた生き方・考え方を偉人ではなく、子どもの側に移して描いたのがこの直後に発表された『よい子つよい子かしこい子』（小峰書店、小学生文庫、一九五〇年）である。そこでも上澤は、戦後における新しい生き方・考え方を模索している。そこで出した答えも、『偉い人たち 盲の大臣』に続くように、「人のために」（同書、五一頁）ということであった。勅語・修身に代わるものとして世のため人のためという生き方を押し出したのであるが、キリスト教の考えにも通じるものであった。この新しい考え方は、地元栃木や鹿沼における偉人伝への彼自身の関心と執筆にも生かされていく。

やがて、このような視点は、長く活動した東京・中央に代って、華美さ・派手さはないが、生きた子どもたちに直接触れられる現場、それもたまたま帰郷する契機は疎開で、かつ郷里という気心の知れた場と地ではあったが、その地方の現場に活動の拠点を据え直す上澤の新しい生き方につながっていくものである。

上澤の中に童話研究などの研究的・科学的アプローチの視点が戻り、さらには児童学の用語とそれに沿う発想・取り組みが新たに視界に入ってくるのは、それから六年後で、鹿沼幼稚園を開園して間もない時期に発表した『保育のための童話学』（山下俊郎責任編集幼児保育教室3、恒星社厚生閣、一九五四年）に至ってからである。

その『保育のための童話学』では、科学化・理論化の営為には情熱をもって取り組んでいる。さらに、児童学を視界に入れ、自ら児童学の用語を使用しているのも、同書である。しかし、くり返すようにその理念や論理、体系や内容を明らかにするには至っていなかった。すでに高齢でもあり、その後も児童学について、その内容的なことについては、ついに語る事がなく終わるのは残念なことであった。

9 上澤の再評価

(1) 上澤の貢献

上澤は、戦時体制の進行、さらに戦局の悪化と危険が増大する下で、仕事どころか、もはやまともな生活さえ困難になった東京を離れ、郷里の鹿沼に疎開する。以後、結局二度と東京に住まい・活動の中心を戻

すことはなくなるが、そのことはその後の上澤の理念や活動にどのような影響を与えたのであろうか。

明治・大正の頃であれば、大都會の東京で活躍していたのに、都会やそこでの生活に別れを告げて地方に生活の拠点を置き換えた人、あるいは資本主義的な生き方を否定するように農業中心の自給自足的な生活に方向を変えた人は少なくない。前者には郷里の新潟・糸魚川に戻った相馬御風、郷里の秋田・仙北に戻った後藤宙外らがあり、また後者には江渡狄嶺、堀井梁歩らがいる。

これらの人たちは、自らの意思で、東京やそこでの華美さ、浮薄さ、雑踏と決別して、あるいは資本主義的生活を捨てる決断をして大都會やその中心を離れている。それに対して、上澤の場合は、戦争・空襲、その結果住宅の喪失、生活の困難という個人の意思を越える外部要因によって否応なく東京を離れざるをえなかったのであった。

それでも、戦後になってからは、東京に戻るか、鹿沼にとどまるかは、上澤自身の意思と決断如何にかかっていた。結局、鹿沼にとどまることを選択したのは、たんに東京には空襲によって自宅も職場の洗足幼稚園も失われ、足場をもたなくなっていたことだけによるのではないであろう。相馬御風らと共通する地方の尊重や重視という視点がどこかに共有されていたの

ではないか。むしろ、実践のなから地方における子どもの教育や子育ての意義、また幼稚園や子育てであれ、理想を追求するなら地方といった認識を、相馬らとは違った意味ではあるが、実感しつづあつたのではないか、そんなことも考えるのである。

ともかく、上澤は、晩年、郷里の鹿沼中心に過ごし、理想の保育・教育、子どもに必要な童話・お話について改めて考え、追求する。その結果、中央・大都會を離れた郷里で、地元の人たちとともに、理想の幼稚園を設立、実践する機会に与ることになった。その活動・足跡はもう少し詳細に解明され、評価されてよいのではないか。ことに、この鹿沼地方での生活と実践を通して、童話・お話の科学化・理論化に一層関心を深め、さらに児童学に視座を向けることにもなったからである。

さて、上澤謙二が児童学にたどりつくまでには、彼の多様な挑戦と試行錯誤による蓄積が与っている。例えば、一つには童話・お話を含む児童文学に対して、現場や実践から距離を置く単なる創作者や評論家、いわば芸術家・文学者として関わるだけでなく、とくにキリスト教を土台に子どもの生育・保育の現場で童話・お話を実践・応用する教育者・実践家としても関わったことである。

二つには、幼稚園経営に当たり、ニーズがあるから

幼稚園を設置し、運営すればよい、というのではなく、理想を追求することで、既成の園を超えるレベルアップをはかったことである。

三つには、子ども本位の保育の観点から童話・お話について童話学を目ざし、内容を分析、その科学化・理論化に尽力したことである。

上澤は、挑戦を恐れなかったが、そのような多様な挑戦があつたからこそ、より広い視野の必要な児童学にとにかく手が届いたのであつた。それらの土台となつたのが童話等の創作とその実践活動であつた。作品の創作もうまかつたので、彼の童話やお話を幼少の頃母親に読んでもらつて育つた人たちも意外に少なくない。彼自身、ただ創作をして満足するのではなく、作品であるお話を子どもの生育に活用することにも力を注いだのであつた。

上澤がお話の低年齢化と年代ごとのお話の区別を訴え、赤ちゃん話を開拓したのも、子育ての現場と実際に触れ、かつ科学的対応をこころがけていたからこそできたことであつた。低年齢の赤ちゃんの時代は、先述の通り母こそ赤ちゃんの唯一・最大の教師であり、赤ちゃんにとつて母が全ての時代と言いつついる点（上澤前掲『保育のための童話学』）、また動けない赤ちゃんに無限の広がりを教え、話しだけでも楽しく、かつ広い意識を持たせるようになると主張している

点、これらも、子育ての現場・実際にふれていた故に主張できた点であった。

それに、これらの説明がただ観念的に軽く響くのではなく、納得させられるのは、今回見たように、一方で幼稚園を子ども本位に運営し、レベルアップをはかる際、自らも実践者であったことからである。他方でその実践とともに、科学・理論化の努力も続けることで得たものであったからである。作家であるにとどまらず、童話学に挑戦したのも、その先に児童学を描こうとしたのも、理論化・科学化への視点や実践姿勢を失わなかったからにはかならない。

このように、幼児本位の視点から、あるいは保育の観点から、童話、お話といった作品を創作すること、加えて童話・お話の分析・理論化を試みること、さらには幼稚園や日曜学校においてそれらを実践したことが文学面における上澤の顕著な実績であり、業績である。

そのような取り組みがあったからこそ、子ども研究を深めるために、より広く総合的な学問、例えば児童学にも視界を広げることができたのである。

(2) 結びに ―未完の児童学―

上澤にあつては、童話学をも包み込み、その先に位

置するはずであった児童学に關しては、明快に認識できるほどの像や内容が示されることはなかった。上澤は、自らの関心を持つ童話・童話学など子どもに關する研究について、個々バラバラに完結して終了するだけではなく、それを他分野との連携なり統合なりに向かわせる必要を認識していた。その一環として児童学も浮かびあがってきたのである。

もつとも、くり返すように上澤は、活字になつたもので見る限り、総合学として具体的な体系や内容まで明確に意識し、描きあげたわけではない。それ以前の連携や協力の学としての位置づけであつたであろう。その点で、残念ながら、児童学がどのような体系や内容で描かれていたかは不明である。ただ児童文学や童話学に打ち込めば打ち込むほど、限界を感じ、子どもによりよい暮らし、より良い生き方などの全体像を総合的に解明する必要があるためであろう。そこから、童話学など既存の取り組み方法を超えて、他分野との「協同と結合」などもつと先のことも視界にいれ、その中に児童学もおぼろげに描きはじめていたのである。

そのところを、彼自身に語らせると、童話学的確な研究、童話と感情生活の眞の解明には、「児童学、心理学、教育学、性格学、精神衛生学、精神分析学、生理解、文学、童話学などの協同と結合に待たねばならなくなるでしょう。」(上澤前掲『保育のための童話

学』(二一頁)という視点に到達したのである。この説明では、とくに児童学が最初に置かれていることに注目したい。「協同と結合」の軸に児童学を考えていたのではないかと推測もできるからである。

このように、上澤は、童話学、さらにはそれを超える児童学という用語を使い、子どもに関する多分野にわたるあり方に目を向けかけた。児童学という用語を使ったことは、彼なりに、児童学の姿、方向を多少なりとも考えてみた結果であるとみてよい。明らかに児童文学や童話学を超える連携、協働、あるいは総合的研究やアプローチの必要を感じ、それに関わる寸前まで辿り着いたのであった。

この認識は、これ以上具体的な形で先に進んだわけではない。しかし、児童学という用語を使ったこと自体に先駆性がある。児童文学にとどまらず視界を広げ、連携学あるいは総合学の一端なりとも認識しはじめたことをうかがわせるからである。その点では、児童文学者にあつては珍しく文学を超えて他の分野・領域を意識し、子ども学につながる児童学の姿・あり方までを、おぼろげであれ、描いてみたのではないかと推測できるのである。ただ、それ以上には、児童学について、彼は具体的に、あるいは深く立ち入ることはしていない。

にもかかわらず、上澤の足跡と業績は、子ども学に

つながる児童学を視界に入れた点だけでも、子ども学の展開を考える場合に忘れてはならないものである。とくに子ども研究では最もすすんできた一つである児童文学領域における科学的・理論的アプローチによる客観化・理論化の課題に挑戦している点で、また児童文学・童話学を超える児童学を内容に不明のままではあれ、視野の中に置き、児童学を他分野との「協同と結合」の方法・視点で思い描こうとしていた点で、今日の子どもの学展開につながるささやかな芽のようなものが感じとれる。

上澤は、子ども学ではもちろん、児童学の領域でも十分に評価されずにきたが、子ども学の歩みを考え、さらに今後の深い掘り下げや展開を考える時には、無視できない足跡を標した人と言つてよい。くり返すが、一九五四年という時点で、内容には立ち入ることができなかつたにしろ、児童学という新しい学問に手がかりを求めかけたということだけでも、他に勝る優れた到達点と評価してよいであらう。

〔謝辞〕 本稿をまとめるに際しては、鹿沼幼稚園・上澤善樹氏および鹿沼市立鹿沼図書館にお世話になった。心から御礼を申し上げます。―

〔参考文献〕

- 『児童研究』創刊号、一八九八年一月、東京教育研究所・教育研究所
- 木村小舟『少年文学史』明治編上・下・別巻、童謡春秋社、一九四二・四三年
- 中西昇・松村康平編『児童学』誠信書房、一九五九年
- 佐野美津男『子ども学』農村漁村文化協会、一九七五年
- 津守真『子ども学のはじまり』フレールベル館。一九七八年
- 片山登美子『児童学』昭和堂、一九八二年
- 小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮沢康人編『新しい子ども学』海鳴社、一九八五・一九八六年
- 編集委員会編『栃木の文学史』栃木県文化協会、一九八六年
- 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第一巻、大日本図書、一九九三年
- 杉岡津岐子編『子ども学 ―その宇宙を知るために―』ナカニシヤ出版、一九九四年
- 編纂委員会編『栃木県歴史人物事典』下野新聞社、一九九五年
- 佐藤達哉・溝口元編著『通史 日本の心理学』北大路書房、一九九七年
- 中西敏夫編『児童文学者人名事典』日本人編上巻、出版文化研究会、一九九八年

大妻女子大学家政学部児童学科『子ども ―児童学から』

らのアプローチ』相川書房、一九九八年

服部裕子「戦時体制下における上澤謙二の作品 ―キ

リスト教児童文学者が見せた二つの側面―』『愛知

女子短期大学紀要』第三一号、一九九八年三月

小林登『子ども学』日本評論社、一九九九年

小林登『子ども学(チャイルド・サイエンス)のまなざし』明石書店、二〇〇八年

佐々木由美子「幼年文学における一考察 ―上澤謙二

『新幼児ばなし三百六十五日』を通して』『百合女子

大学児童文化研究センター論文集』二〇〇〇年三月

野上暁『子ども学 その源流へ』大月書店、二〇〇八年

大泉溥編『日本の子ども研究 ―明治・大正・昭和―』

一〜四巻および別巻、クレス出版、二〇〇九年

〔上澤謙二の名著〕

上澤謙二『耶穌伝』洛陽堂、一九一六年

上澤謙二編著『子供を真中にして』児童説教第一集、

あをぞら社、一九二四年

上澤謙二『上澤謙二物語集』全八巻、新生堂、一九二五

〜一九三一年

上澤謙二『獅子を降参させた人の話』聖書物語文庫

一六巻、昭陽堂書店、一九二八年

上澤謙二『イエス・キリストの話』上下、聖書物語文

庫二〇・二一巻、昭陽堂書店、一九二八年

上澤謙二『大伝道者の話』聖書物語文庫二三巻、昭陽堂書店、一九二八年

上澤謙二『動物愛読本』フレンドリーライブラリー5、婦人の友社、一九三〇年

上澤謙二『子供の生活を裏から観る』新生堂、一九三四年

上澤謙二『新幼児ばなし三百六十五日』全四巻(春・夏・秋・冬の巻)、厚生閣、一九三五・一九三六年

基督教童話協会(上澤謙二)編『基督教児童文学選集』第一・第二巻、新生堂、一九三五、四一年

上澤謙二『小学実話読本』全四冊、厚生閣、一九三七年

上澤謙二『題目別 児童説教百集』日曜世界社、一九三八年

上澤謙二『新幼児ばなし三六五日 秋の巻』厚生閣書店、一九三八年

上澤謙二『少年少女のための戦線、銃後物語』新生堂、一九三八年

上澤謙二『将兵を泣かせた軍馬・犬鳩武勲物語』実業之日本社、一九三八年

上澤謙二『力を合わせて 一少年少女銃後実話一』童話春秋社、一九四〇年

上澤謙二『保育記録 園児と遊ぶ』厚生閣、一九四一年

上澤謙二『赤ちゃんばなし』厚生閣、一九四二年

上澤謙二『子供聖書』教文館、一九四二年

上澤謙二『大きな日の丸小さな日の丸』地平社、一九四四年

上澤謙二『偉い人たち 盲の大臣』羽田書店、一九四八年

上澤謙二『幼児のお話教育』巖松堂書店、一九四八年

上澤謙二『クリスマスの本』日本基督教団出版事業部、一九四八年

上澤謙二『幼児の談話教育』巖松堂書店、一九四九年

上澤謙二『愛は羽ばたく』中央出版社、一九四九年

上澤謙二『よい子つよい子かしこい子』小峰書店、一九五〇年

上澤謙二『一年生の聖書読本』富山房、一九五〇年

上澤謙二『世界クリスマス伝説集』富山房、一九五一年

上澤謙二『赤ちゃんばなし集―お母さんのために―』富山房、一九五一年

上澤謙二『幼児ばなしの話し方 理論と実際』恒星社厚生閣、一九五二年

上澤謙二『幼児にきかせるお話集』大日本雄弁会講談社、一九五三年

上澤謙二『ジョン・ワナメーカー』創元社、信仰偉人伝双書、一九五三年

上澤謙二『保育のための童話学』山下俊郎責任編集幼

児保育教室3、恒星社厚生閣、一九五四年

上澤謙二『いま・ここ保育』恒星社厚生閣、一九五五年

上澤謙二『幼児のお話』牧書店、一九五五年

上澤謙二『幼児のためのゲームと工作365日』幼児のためのお話全集第五巻、あかね書房、一九六〇年

上澤謙二『新幼児ばなし365日』第一集四〜八月、第二集九〜十二月、第三集一〜三月、あかね書房、一九六〇年

上澤謙二『新幼児ばなし365日 三・四月の巻』厚生閣、一九五六年

上澤謙二『新幼児ばなし365日』改定版、一〜六月、七〜十二月、恒星社厚生閣、一九六三年

上澤謙二『クリスマス童話伝説集』ヨルダン社、一九六五年

上澤謙二『新幼児ばなし春夏秋冬百撰』恒星社厚生閣、一九六七年

上澤謙二文・上田次郎絵『メリークリスマス』基督教視覚センター、AVACOえほん、発行年不詳